ボタン

LAMP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボタン

【Ｎコード】
Ｎ８３３１Ｋ

【作者名】
ＬＡＭＰ

【あらすじ】
少し早い衣替え。しっかり者の彼氏と、少々だらしない彼女のお話。

衣替えの季節が近づいてきて、彼女の部屋は騒然となっていた。
元々掃除が苦手な彼女である。春物・夏物と秋物・冬物の服を分けるこの季節は、本当に苦手なのだろう。

「服の仕分けにレンホウさん呼ぼうか♪」
そんなこと言いながら、衣類の山に突っ込んでは

「これは…まだ着るかな？これは着ない。あっ！？これって、あの時の…」

何故か楽しそうに脱線し続ける。一度独りでやったら、寝る場所がなく台所で寝たと聞いた。
広げるだけ部屋中に服を広げて、片付けは終わらなかったというオチらしい。

（僕を呼ぶのが、彼女なりの予防策なんだろうな…今日中に終わらすための）

そう考えるとハァ～と、ため息が出てしまう。

「幸せが逃げるよ」

すかさず突っ込んでくる彼女に

「うるさい、ボケェ！！サボらずに、早く片付けろ！！」

少々トゲトゲしくなるの仕方ないことなんだろう。

僕はまた一枚、慣れた手つきで彼女のコートにカビ防止のカバーを付け、クローゼットの一番奥にかけた。
かれこれ一時間近く、同じ作業の繰り返しだ。

「ごめんね～、いつもいつも」

謝りながらも、どこか嬉しそうな彼女。普通、こんな情けない姿を彼氏に見せてるんだから、少しは反省して貰いたいんだが…

「別にいいよ。もう毎度のことだし。この惨状は」
「惨状って…仕方ないでしょ！！女は着るものが多いのよ。年がら年中スーツでいい、あなたとは違うの！！」

「いや、それでもさ…これは酷いんじゃないのかな」

またハァ～、っとため息が出てしまった。でも、何故だろう？いつもの彼女なら、さっきのような会話では

反省してます

すみません

すぐに謝ってくるはずなのに。そこはかとなく嫌な予感を感じながら、僕は作業を続けていた。

「ふふ～ん♪私にそういう態度とれるの？」

ほら、なんかきた…勝ち誇った顔でこっち見てる。絶対にろくでもないことだ。

「私の右手にあるコレが目に入らぬか！！」
どこぞの時代劇口調で、衣類の山から飛び出してきた彼女。その手には錆びついているも、かつては金色をしていたものがあった。

「ボタン？」

「そうよ、ボタン」

「…誰の？」

「鈍いわね、あなたのよ」

どうだどうだと、目の前に見せつけてくる。

「…で、それがどうかしたの？」

「えっ！？いや、その…思い出の証というか、少しは恥ずかしがりなさいよ！！」

思っていたリアクションと違ったのか、声がうわずっている彼女に思わず苦笑が漏れてしまう。

「なに笑ってるのよ、失礼ね！！」

「ごめん、ごめん。確かに恥ずかしいな」
「そうでしょ。これを見せびらかして欲しくないなら、頑張って片付けてよね」

したり顔の彼女。かなり強気なその態度を、一変させてやりたくなる。

「なぁ、それ渡した時のシチュエーション覚えてる？」

「えっ！？」

「ほら、卒業式終わった後にお前が家まで押し掛けてきて…」

したり顔一変。急に大粒の汗が噴き出すさまに、僕は笑いがこらえられない。

「大声で第二ボタンちょうだい、なんて言うもんだからさ。家族中に冷やかされて。その日は赤飯まで用意されたんだよな…懐かしいなぁ、あの頃」

「うっ…あっ…」

まるで金魚のように口をパクパク。顔は、風呂上がりよりも真っ赤な彼女。

何も言葉を出せない彼女の腕を引っ張り、無理やり唇を奪う。

「何も恥ずかしくはないんだよ、そんなことぐらい。めっちゃ嬉しかったからさ」

「だから、いつまでも呆けてないで。ちゃんと片付けろよな」

さっきよりももっと真っ赤になった彼女を、僕は苦笑混じりに眺めていた。ただコクコクと首を動かして、衣類の山に戻っていった彼女。

小声で、イジワル、と言われたのは聞こえないふりをして。

思えば、あの頃からずっと僕は彼女に恋をしている。

それは、急に燃え上がるような熱い恋ではなくて。
桜の花弁が落ちるかのように、ゆっくりゆっくりと彼女に恋していった。
あの第二ボタンだって、正直少しは焦った部分もあったしね。
部屋の窓から一枚。落ちてくる桜の花弁。それに見とれまた片付けをサボる彼女。
本当にだらしない人だけど、それでも僕はずっと彼女が好きなんだろう。
溜め息混じりに僕はもう一度、触れるだけのキスをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8331k/

ボタン

2011年10月9日23時58分発行